

## 社会はまるごと学校—— すべての大人が先生です



表情を変えるロボットが理科の特別授業に登場。教室を巡回しながら出題する姿に驚きの声が上がった(慶應義塾幼稚舎で。画像の一部を修整しています)(6面へ)

巻頭特集 第5回全国学生英語プレゼンテーションコンテスト

**最優秀賞に佐藤圭さん** (横浜市立大) 2・3

高円宮杯 第68回 全日本中学校英語弁論大会 4・5

慶應義塾幼稚舎でロボットが理科の授業 6

学校×企業 西大和学園中×江崎グリコなど／女子聖学院中×セブン-イレブン・ジャパン 7

西南学院大学読書教養講座／お知らせ・info 8 第66回全国小・中学校作文コンクール 9

北東アジアディベート大会 10 リレーエッセー カナダ・トロント大学「普遍的学問のための多様性」 11

2016.12

Vol.24

最

優秀賞を受賞した横浜市立大3年の佐藤圭さんは、3回目の出場で頂点を極めた。テーマに選んだのは、国際的に活躍する建築家、坂茂さんの紙管を用いた建築。被災地の仮設住宅に用いられていることを紹介しながら、日本ならではの防災・減災技術として世界にアピールするプレゼンテーションを、画像を効果的に使った。

紙管による仮設住宅の利点を、コスト面の安さ、安全性の高さ、耐久性の観点から説明。「普通の仮設住宅は建設費が240万円、解体費が100万円かかるのに対し、紙管を使えば10万円未満で済む」と訴えた。

避難所の体育館に紙管の骨組みを作り、カーテン代わりに布をつるせば、プライバシーも確保され、ストレスも軽減される。紙を厚くすることで、防水、防火面の問題もクリアできるといふ。

紙管の仮設住宅を



紙管を用いた建築の利点について発表して最優秀賞を受賞した佐藤圭さん

に運ばれ、10年以上たった今も使われていることを紹介。「紙管は再生紙を使うので、森林破壊やダイオキシンの放出もなく、環境に優しい」と強調した。

今回の勝因について佐藤さんは「英語による質疑応答がこわかった。どこから聞かれても答えられるよう、情報集めに力を入れた」と語った。

坂さんが教える大学のゼミの報告会を聞きに行ったり、紙管工場を見学したりして、想定問答を練り上げてきた。的確な受け答えも、審査員から高く評価された。

大学に進学したが経済的理由で中退し、働いた後、再び大学で学ぶ佐藤さんは、第3回コンテストで最優秀賞を受賞した太田杏奈さんと同級生。一昨年の太田さんの発表を目標にしながら、練習を重ねてきた。「彼女と同じレベルのプレゼンテーションをやっと再現できた。あきらめないでよかった」。ウイーンに留学中の太田さんに受賞を伝えると、「おめでとう」とメールで返信があったという。

個

人の部で優秀賞に選ばれた神戸大1年の森原佳歩さんは、中国人観光客の中でも、特にカップルの客をターゲットに、香川県の文化を学ぶツアーを提案した。

ツアーを構成するのは二つの「E」。最初の「E」は「Experience（体験）」で、旅行者は香川の特産品のうどんや、うちわ作りを体験する。もう一つの「E」は「Exchange（交換）」

で、カップルを事務所に招き、今後、よりよい観光ツアーを企画するための意見交換をする。

森原さんは、このツアーで共同作業をすることで、カップル同士はもち

中国人誘客で絆



個人の部で優秀賞となった森原佳歩さん

ろん、日本人と中国人の絆も強まり、将来的には両国の良好な関係を「Establish（確立する）」できると、三つ目の「E」を使って語りかけた。

森原さんは小学校時代の1年間を上海で過ごした。「中国には親近感があります。もともと日本と中国が仲良くなれたら、という思いを込めました」と話した。

第5回 全国学生英語プレゼンテーションコンテスト

The 5th Annual All Japan Student ENGLISH PRESENTATION CONTEST

堂々アピール 聴衆説得

英語力だけでなく、論理的な思考や説得力などを、画像や映像を交えて競う「全国学生英語プレゼンテーションコンテスト」(主催・神田外語グループ、読売新聞社)が12月3日、東京・内幸町のイノホールで開かれた。第5回の今年は、全国の大学、専門学校など149校から、過去最多の699人が応募する激戦りとなった。この日はまず2次予選が行われ、これを勝ち抜いた個人5人、グループ5組が本選に進み、最優秀の文部科学大臣賞には、横浜市立大3年の佐藤圭さんが選ばれた。(この記事は、12月15日付の読売新聞朝刊に掲載されました)

グ

ループの部で優秀賞となったのは、青山学院大3年の坂寄妃奈子さんと田島ジョセフ勇氣さん。2人は、ゼミの仲間で、消費大国である米国に向けて、風呂敷を使った買い物袋「Wrappi（ラッピ）」を売り込んだ。

まず、買い物袋として人気の高いエコバッグについて「安いものは石油が原料の材料や、有機栽培ではない綿で作られており、簡単に洗うことが出来ない」と、弱点を指摘。代替品として風呂敷を紹介した。

ただ風呂敷は包み方を覚えないと使いにくい。その不便さ解消のために提案したのが、面ファスナーとひもをつけ、簡単に買い物袋に変身するラッピだ。

「自分たちにも作れてユニークなもの考えた」と話すインプレッション賞個人の部の富勘四郎さんは、関西大3年。大阪から車で約1時間の千早赤阪村を訪れる、外国人向けの体験型ツアーを提案した。村人のスローライフにふれ、身も心も癒やされる旅行を「フルサト・セラピー」と命名。築400年の家屋が並ぶ街並みを散策したり、金剛山の山頂でヨガを体験したりする1泊2日の行程で、料金は2万円と設定した。

「どのようなワードを使えば伝わるか、その吟味に時間をかけた」と富さん。「今度グループのメンバーと素晴らしい発表を作り上げる体験をしたい」と来年への抱負を語った。



個人の部でインプレッション賞を受賞した富勘四郎さん



グループの部で優秀賞を受賞した坂寄妃奈子さん(左)と田島ジョセフ勇氣さん

グループでインプレッション賞を受賞したのは、近畿大4年の澤山未那さんと佐藤穂波さんの2人。絶妙なかけ合いを披露しながら、新潟であめ細工作りを体験するツアーを売り込んだ。

見て、作って、食べて、あめ細工を楽しむだけでなく、

原料となるもち米作りの体験も組み合わせた。明治時代に建てられた古民家への宿泊や、郷土料理の作り方を教わる教室も含まれ、「旅行者に甘いあめだけでなく、甘い思い出も提供するツアー」と締めくくった。

澤山さんが「楽しさが伝わることを重視した」と話す、佐藤さんは「かけ合いでオーディエンスが笑ってくれたのがすごくよかった」と笑顔を見せた。



グループの部でインプレッション賞となった澤山未那さん(左)と佐藤穂波さん

楽しさ伝わるよう

受賞者 (敬称略)
文部科学大臣賞 (最優秀賞)
佐藤 圭 (横浜市立大3年)
優秀賞
個人の部
森原佳歩 (神戸大1年)
グループの部
坂寄妃奈子 (青山学院大3年)
田島ジョセフ勇氣 (青山学院大3年)
インプレッション賞
個人の部
富 勘四郎 (関西大3年)
グループの部
澤山未那 (近畿大4年)
佐藤穂波 (近畿大4年)

MEMO 全国学生英語プレゼンテーションコンテスト (通称: プレコン)

グローバル社会での活躍を目指す学生たちに腕を磨く機会を提供しようと、2012年に始まった。設定されたその年のテーマから一つを選び、それに沿った原稿を作ってプレゼンテーションを行う。1次予選、2次予選を通過した個人・グループが本選に臨む。制限時間は10分以内で、その後、審査員による英語の質疑応答がある。審査項目は、内容(40点)、構成(15点)、口頭発表力(20点)、説得力(15点)、質疑応答(10点)。

<今年のテーマ>

- ①インバウンドを地方に! 体験型ツアーを提案
- ②日本の防災・減災ノウハウを世界にアピール!
- ③海外向けにひと工夫! 製品アイデアを売り込め

◆高円宮杯 第68回

全日本中学校英語弁論大会

高円宮杯第68回全日本中学校英語弁論大会の決勝大会が11月25日、東京都千代田区有楽町のよみうりホールで開かれ、九州学院中3年の黄允珠（ファン・ユンジュ）さんが1位に選ばれた。今年9月から各都道府県で行われてきた予選大会を勝ち抜いた代表生徒151人が11月23、24の2日間にわたり決勝予選大会に出場。上位27人が決勝大会に進み、練習の成果を披露した。大会後、同区内幸町の帝国ホテルで、大会名誉総裁の高円宮妃久子さまをお迎えして開かれた記念セレブションでは、表彰式と上位3人によるスピーチが披露された。（記事は12月15日の読売新聞夕刊にも掲載されました）

東京五輪で国際交流を

1位



ファン ユンジュ 黄允珠さん

1位の黄さんは父親がハンドボール女子の日本代表監督を務めた黄慶泳（キョンヨン）さん。小学校時代、父親の率いる日本チームが祖国の韓国

かけとなったのは、今年のリオデジャネイロ五輪で開催国ブラジルの女子柔道コーチだった日本人の藤井裕子さんの言葉。「外国でコーチとなることに異論はあるが、スポーツには国境がないと信じている。以来、父親の努力と信念を理解した。英語、韓国語、日本語を話す黄さんは「2020年の東京五輪では別の言葉も学んで、複数言語の通訳になり国際交流に貢献したい」と結んで喝采を浴びた。



仁科洋志さん

4位 武士道精神に共感

4位の仁科君は、ワールド・ファミリー賞も併せて受賞。「二つの賞をいただき感謝」と笑顔を見せた。イタリア生まれの仁科君は3歳の時に帰国した。その際「どうして」と聞いた彼に、母親は「日本人として育ってほしいから」と答えた。その意味を解ききつかけが3年前、大河ドラマで見た会津戦争と、15歳で読んだ新渡戸稲造の「武士道」だった。その武士道の精神が



樋笠愛結芽さん

5位 信念のフェミニズム

5位の樋笠さんの演題は「女子は平等でなければならぬ」という固い信念を訴え、「悔いなくやり続けることができた」と振り返った。通っている中学校で給食の時間、男子は運搬、女子は配膳と教師が決めた。だが、彼女が当惑したのは教師の決め方ではなく、それを生徒たちが素直に受け入れた事実。「男女で役割が違うことを刷り込まれているのでは」と疑問が湧いた。



年増ルデヤさん

2位 「初めて」積極的に

2位の年増さんは、米国で体験した英語によるコミュニケーションの難しさを取り上げた。父親とともに渡米した際、ハンバーガー店で父親が「First（初めて）」と言ったのに店員が「Worst（最悪）」と聞き間違えた。発音が苦手なのに一生懸命話す父の姿に「なぜ」と思ったことも。

しかし、会ったことのない人と話すのが「初めて」だったので、自分もすぐには英語が出てこない。徐々に慣れ、初めて会う人にも自分から話しかける努力をしているうちに積極的に話せるようになった。そして、「意識が変われば行動も変わる。『最悪』と思ったことも、知らなかった喜びへの『第一歩』になる」と演題に言及する形で締めくくった。

年増さんは「いろいろな人に感謝したい。今後留学できるように英語力を身に付けていきたい」と話していた。

3位 政治 もっと話そう



安田穰さん

安田君は米カリフォルニア州に今夏、ホームステイした体験を題材にした。ホストファミリーが彼を連れて街のレストランで昼食をとった際、ホスト家族の母親が知人の女性と話している。趣味の話か、休暇の話か、と聞いてみると、テーマは大統領選挙だった。しかも、その母親と知人はそれぞれ支持する候補が違うのに、攻撃的になったりせず、相手の言い分を傾け、違う考え方があることを受け入れていた。

天気や週末の予定と同じように政治を日常的な話題にしているのを見て、日本との違いに気づいた。そして「国がどのように統治されるかに、我々ももっと関心や熱意を示すべきだ」と思い至り、「自分の意見を伝える技術を使えよ。もっと話そう」と訴えた。

受賞後、「自分の力を出し切れたと思う」と語った。



新井慶大さん

6位 環境保護へ独自提案

6位の新井君が心がけたのは「実体験と結びつけて訴えること」。テーマは環境問題だ。温暖化が進み、海面が上昇すれば住める場所がなくなってしまう。これに衝撃を受けた新井君の取り組みは、エプロンの布で買い物用のバッグを作ったり、ゴミを分別回収して、リサイクルショップを利用したりすることだった。

そしてリデュース（削減）、リサイクル、リユース（再利用）の三つのRにリカバリー（再生）を加えて四つのRを提案。「これですてきな未来を地球にもたらそう」と力強く訴えた。



平岩諒さん

7位 平和の尊さを訴える

7位の平岩君は平和の尊さを訴えた。愛知県の祖父宅で、軍服を着て馬にまたがる男性のモノクロ写真を見つけた。それが第2次大戦で戦死した自分の曾祖父の写真と知り、戦争は歴史ではなく、自分にもつながっているのだと認識する。

昨年12月に訪れた広島原爆ドームで、たった一つの爆弾で都市を破壊し尽くした戦争に思いをはせ、原爆ドームの訪問者がみな、平和の尊さを理解している、と感じた。そして、最後に「すべての人に平和の尊さを理解してもらいたい。それが戦場の曾祖父とも同じ夢であるはずだ」と結んだ。

世界へ向け意見発信

上位入賞者（敬称略）

- 1位 [No Borders] 黄 允珠（熊本市・九州学院中3年）
- 2位 [First, Not Worst] 年増ルデヤ（宮崎市・県立宮崎高付属中3年）
- 3位 [Let's Talk About It!] 安田 穰（兵庫県芦屋市・市立山手中2年）
- 4位 [The Spirit of Japanese People] ワールド・ファミリー賞も受賞 仁科洋志（埼玉県新座市・立教新座中3年）
- 5位 [Feminism] 樋笠愛結芽（高松市・市立紫雲中3年）
- 6位 [My Small Project to Save the Earth] 新井慶大（群馬県太田市・市立東中3年）
- 7位 [How Precious Peace Is] 平岩 諒（宮城県名取市・市立第二中3年）

【主催】 読売新聞社  
 日本学生協会（JNSA）基金  
 【後援】 外務省、文部科学省、NHKほか  
 【特別協賛】 日本コカ・コーラ  
 【協賛】 日本IBM、三菱商事、べんてる、ワールド・ファミリー、国際ソロプチミスト東京-東、ECC、ベストワールド

人の表情を表せるロボットが教師とともに教壇に立つ理科の特別授業が  
12月15日、東京都渋谷区の慶應義塾幼稚舎で行われた。

表情さまざま 児童たちのやる気促す

# 慶應義塾 幼稚舎で ロボットが授業

教師がプログラムを設計  
その瞬間、幼稚舎の理科実験室がどよめいた。「うわ、怖っ!」。児童たちが驚いたのには理由がある。目の前の無表情なロボットが、いきなり目を吊り上げて険しい顔つきになったからだ。  
カエルの解剖を通して人体のしくみを学ぶ小学6年の授業の最終回。解剖に関する質問を次々に繰り出すロボットは、英ベンチャーが開発した「ソシボット」で、表情アニメーションソフトによって様々な感情を顔に投影できる。  
最先端の知能プログラムを研究開発している慶應義塾大学理工学部・山口高平教授の研究室が今年2月に日本で初めて購入した。ロボットが加わる特別授業は今年1月の「てこの原理を学ぶ」に続き2回目で、山口教授と幼稚舎の校長原礼士教授が連携している。

通常の知能プログラムは専門家が設計するが、今回は人工知能(AI)プログラムを自動生成するツールが活躍。校原教諭はこのツールを使い、授業シナリオに沿ったプログラムをわずか2日で完成させた。山口教授は「開発したプログラムのAI機能はまだ低い。AIのプロフェッショナルではない、校原教諭が短期間で自ら設計できたことは画期的」と話す。  
**教室回ってクイズ出題**  
授業の冒頭に怒ってみせたソシボットだが、直後に「びっくりした?」と表情を和らげた。  
「それは驚くよ」とホッとした児童たちに対し、「それじゃあ、授業を始めよう」と切り出した。「カエルの前肢と後肢の指の数はそれぞれいくつ?」  
班ごとに二択か三択の中から解答の札を選ぶと、机上の画像セン

サーがその札を認識。サーバーが自動的にチームの成績をつけていく。  
台車ロボットに乗ったソシボットは研究室の学生が遠隔操作する。実験室を回りながら出題を続け、「そろそろ、みんな分かったかな?」と解答を迫ると、児童たちは「え、もう答えるの?」と慌てたり、「眉が動いたよ、眉が」とソシボットの表情を気にしたりしていた。  
**「将来は教師の手助け期待」**  
授業の後半は拡張現実(AR)の体験タイム。校原教諭の出番だ。「痛いことはしないから前に出てきて」と、ソシボットに促された児童が大型モニターの下に移動する。「自分の肝臓のある場所を示して」と指示された子供が腹部左側に手を当てると、その全身映像がモニターに映り、さらに肝臓のイラストが正しい位置の腹部右側に合成される。AR技術を使ったシステムを生かしながら、校原教諭は心臓や肺、胆嚢などの場所を丁寧に解説していった。授業後、速水花さん



拡張現実(AR)の技術で、肺などの臓器の位置を学んだ

頭を傾けて、児童たちに話しかける表情



1問目はどうだった? 余裕? じゃあ2問目いくよ

難しい問題を出すときの表情



次の問題は難しいかもしれないよ。先生の話ちゃんと聞いていたかな?

驚きの表情



2問目も簡単だった? すごいねえ

は「ロボットの表情が変わるので、やる気が出たし、勉強という感覚がないまま問題に答えられた」。河野真央さんは「面白かった」と振り返りつつ、「対話ができなかったのでロボットは80点、先生は100点!」と採点した。  
校原教諭は「ソシボットが教室を巡回したことで授業が締まった。一人ひとりが『先生に見られている』と感じていたのでしよう」と授業を振り返り、「将来、AIロボットが教師の手の回らない仕事をカバーしてくれば、教師は助かると思います」と期待していた。

## クイズや味覚試験で 「食」の大切さ学ぶ

西大和学園中 ×江崎グリコなど

「読売教育ネットワーク」に参加している日本生命、大和証券、東レ、江崎グリコ、読売新聞の5社による出前授業が11月22日、奈良県河合町の西大和学園中学校で行われた。

授業では、各社の社員が業界の概要や仕事の内容を紹介。同校の1年生約220人は希望する企業の教室に分かれ、それぞれ、保険の仕組みや株価、水を浄化する技術などについての講義に聴き入った。

江崎グリコの授業では、お客様センターの道盛久美子リーダーらが、トランプ次期米大統領の離脱発言によって、今後の行方が注目されている環太平洋経済連携協定（TPP）や、まだ食べられるのに廃棄される「食品ロス」などについて、クイズを交えながら解説。生徒たちは、液体の甘味やうま味などを判断する味覚試験や、異なる香料が入



嗅覚試験を体験する生徒たち。右奥は道盛リーダー

ったジュースのにおいを比べる嗅覚試験などを体験した。藤田慧斗君（13）は「毎日、かなりの量の食べ物が無駄になっていることを知って驚いた。普段あまり意識しない食の知識が深まった」と話していた。



生徒たちにアドバイスする吉野さん（左）。右は小屋敷記者

女子聖学院中学校（東京都北区）で11月9日、「働く」ことをテーマにした講演会が開かれ、同校の3年生約130人が出席した。講師は、「セブン・イレブン・ジャパン」ダイバーシティ推進部の吉野早央里さん（30）。読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局の小屋敷晶子記者も聞き役として登壇した。大学卒業後、総合職として「セブン・イレブン・ジャパン」に入社した吉野さんは、入社直後から直営店舗の副店長、店長を任せられ、経営アドバイザーとしても奮闘した経験を披露。バレンタインデー商戦

を例に、店舗づくりや品揃えには女性の視点が欠かせないことも力説した。

子育て中の社員が休日出勤しなければならぬ時のために、臨時の保育場所を設ける取り組みなど、女性が働きやすい職場を作る現在の仕事についても、実例を挙げて紹介した。

吉野さんは「考え方だけで、つまらないと思っていた仕事も楽しくなる」と強調。「学生時代はたくさんのお金があった。社会人になるとお金はあっても、時間がなくなる。学生時代にいろいろなことに挑戦してほしい」とエールを送った。

生徒からは「商品開発にはどのくらい時間がかかるのか」といった質問が出され、吉野さんは「いろいろなメーカーと協力して作るの、だいたい半年くらいはかかる」と答えた。

講演を聴いた畑中彩花さん（15）は「書かれた情報だけでは分からないことが、実際に働いている人の話を聞くことで理解できた」、また、高島優さん（14）は「会社で働くということやサービス業の現場についてイメージできた」と話していた。

## 店舗づくり、職場づくりの楽しさ語る

女子聖学院中 ×セブン・イレブン・ジャパン



## 西南学院大学 公開授業、東京で

# 卒業生の直木賞作家 2氏語り合う

創作の源流などを語り合う、葉室麟さん(中央)と東山彰良さん(右)。左は尾崎アナウンサー

西南学院創立100周年記念「読書教養講座 in 東京」(西南学院大学、活字文化推進会議主催)が11月23日、東京都千代田区のサピアホールで開かれた。講師はいずれも同大卒業生の直木賞作家、葉室麟さんと東山彰良さんで、「挫折と失敗、創作の源流」をテーマに語り合った。

50歳で作家デビューした葉室さんは「人生の終盤戦に差し掛かって、生きてきてどうだったのかを表現したいと書き始めた」と、創作に至った心情を吐露。東山さんは「大学院時代、論文に行き詰まっていた頃、アイデアもないまま書き始めた小説がデビュー作になった」と、人生の転機について話した。

司会を務めた日本テレビアナウンサーの尾崎里紗さんも同大の卒業生とあって、大学時代の思い出や福岡の土地柄の話題も飛び出し、約400人が詰めかけた会場を沸かせていた。

### 参加企業を募集 「企業人と新聞カフェ」

大学生と語り合う「新聞カフェ」への参加企業を募集します。当日の読売新聞朝刊を読みながら、働く現実や社会人としての責任感などを学んでもらう取り組みです。

「新聞カフェ」はこれまで、立教大学(東京都豊島区)やお茶の水女子大学(東京都文京区)で開催しています。新聞を一緒に読みながら、御社の社風や仕事のやりがいを、直接伝えてみませんか。

ファシリテーターは読売新聞東京本社記者が務めます。開催の時期や時刻などはご相談ください。

■申し込み、お問い合わせ 教育ネットワーク事務局 ☎03・3217・1484



2016年5月に立教大学で行われた「新聞カフェ」

### 参加者募集

## 「ことばと体験のキッズフェスタ」

「ことばと体験のキッズフェスタ in 東京」(主催・国立青少年教育振興機構、文字・活字文化推進機構、共催・読売新聞社など)が1月28日(土)、東京都千代田区のイノホール&カンファレンスセンターで開かれます。児童文学作家・原ゆたかさんの講演会、スクラップ新聞作りの体験ブースなどが設けられます。

#### ■申し込み

ウェブサイト(<http://www.mojikatsuji.or.jp/katsudou.html#festa0128>)より申し込みフォーム、またはFAXでお申し込みください。1月12日(木)必着。講演会のみ定員500人。後日、聴講通知を送ります。

#### ■問い合わせ

文字・活字文化推進機構 ☎03・3511・7305

## 海外子女教育振興財団が浜松で教育相談

海外子女教育振興財団は2017年2月、海外赴任前の家庭向けの教育相談「赴任前子女教育セミナー」を静岡県浜松市で開催します。本セミナーは東京、名古屋、大阪でも開催しており、3月は福岡の開催も予定しています。

■日時 2017年2月23日(木) 13:00~15:00

講話「海外でのお子さんの教育について」/質疑応答  
/教科書手続きと財団サービスの紹介など

■場所 アクトシティ浜松研修交流センター61研修交流室  
(静岡県浜松市中区中央3丁目9-1)

■対象 初めて海外赴任される方とその配偶者

■定員 10人(申し込み先着順、3人以上の申し込みで実施)

■受講料 無料

■申し込み 財団ウェブサイトの申し込みフォームから  
<http://www.joes.or.jp/funinmae>

■問い合わせ 海外子女教育振興財団 ☎03・4330・1352

News

第66回

## 全国小・中学校作文コンクール

### 高円宮妃迎え表彰式

第66回全国小・中学校作文コンクールの中央表彰式が12月3日、高円宮妃久子さまをお迎えして、東京都内のホテルで行われた。最高賞の文部科学大臣賞を受賞した、小学校低学年の部、徳島市立加茂名南小3年田淵伶愛菜さん、同高学年の部、熊本市立出水小6年田中ひかるさん、中学校の部、千葉県市川市立第一中1年折本空音侑さんの3人に文科省の望月昌代視学官から賞状が手渡された。

コンクールには国内外から3万1841点（小学校低学年4860点、高学年7566点、中学校1万9415点）の応募があった。表彰式では、文部科学大臣賞の後、読売新聞社賞、J・R賞、イーブックジャパン賞、入選の各部門の入賞者が表彰された。

表彰の後、中央審査委員の藤久典・国立音楽大学教授が「書くという行為は、偶然の出来事について書きとめておきたいという気持ちがわき、それを書くことによって必然となり、読む者の心をつかむということだ」と述べた上で、各入賞作についての講評を述べた。

続いて、文部科学大臣賞受賞者の中から、田淵さんが右手に障害がある父と家族の絆を描いた受賞作を朗読した。最後に久子さまが祝福の言葉を贈られた。受賞者を代表して折本さんが「家族や周りの人が与えてくれる心を大切に、自分を磨いていきたい。そして、思いのすべてを載せたこの作文が少しでも誰かの心に届くことを願っています」と感謝の言葉を述べた。



入賞者を代表して感謝の言葉を述べる折本さん

#### 文部科学大臣賞以外の入賞者 (敬称略)

##### 読売新聞社賞

###### 小学校低学年

八木 友美 スイス・チューリッヒ日本人学校日本語補習校2年  
山口 佳恵 埼玉県ふじみ野市立大井小2年  
山本 千陽 秋田大学教育文化学部付属小3年

###### 同高学年

宇野 誠洋 福岡市立草ヶ江小4年  
柏崎日向子 仙台市立向陽台小6年  
加藤 萌衣 京都府・京都女子大学付属小4年

###### 中学校

久保田聖那 高知県四万十町立窪川中1年  
高崎 利基 茨城県筑西市立下館南中2年  
高田 愛弓 静岡県・静岡サレジオ中3年

##### JR賞

###### 小学校低学年

吉原 明里 富山市立芝園小2年

###### 同高学年

笠井 美愛 新潟県佐渡市立畑野小4年

###### 中学校

安野 晋平 栃木県日光市立東中3年

##### イーブックジャパン賞

###### 小学校低学年

斉藤 綾香 栃木県栃木市立栃木第四小3年

###### 同高学年

佐藤 歩岳 山形県酒田市立黒森小6年

###### 中学校

岩本樹利絵 滋賀県甲賀市立甲南中3年

##### 入選

###### 小学校低学年

小宮ゆき糸 東京都・国立学園小1年  
田中 絵美 千葉県松戸市立幸谷小3年  
西坂 侑人 高松市立木太南小2年  
百田 千秋 山口県下関市立生野小2年

###### 同高学年

遠藤 萌花 福島市立福島第三小5年  
香原 凜 山口大学教育学部付属山口小6年  
野呂香菩里 愛知県西尾市立室場小4年  
山本 千尋 秋田大学教育文化学部付属小6年

###### 中学校

久米 凜佳 愛媛県西条市立東予東中3年  
長野 彩乃 埼玉県・開智中3年  
沼津 春夏 東京都立三鷹中等教育学校3年  
深井 聡輔 秋田大学教育文化学部付属中1年

#### ■中央審査委員

梯(かけはし) 久美子(ノンフィクション作家)  
石崎洋司(児童文学作家)  
新藤久典(国立音楽大学教授)

主催=読売新聞社

後援=文部科学省、各都道府県教育委員会

協賛=JR東日本、JR東海、JR西日本、  
イーブックイニシアティブジャパン

協力=三菱鉛筆

文部科学大臣賞の3点の要約は、教育ネットワークのウェブサイトに掲載しています。入賞作品は来年3月に発行予定の「優秀作品集」(紙書籍版)に掲載します。また、47都道府県と海外の最優秀作品を集めた電子書籍版の作品集が同月までにイーブックジャパンのウェブサイトeBookJapan (<http://www.ebookjapan.jp/ebookj/special/st/sakubun2016.asp>)で配信されます。【問い合わせ】読売新聞東京本社事業開発部 ☎03・3216・8606

# 北東アジアディベート大会

## 開催国日本の東大チームが優勝

日本、韓国、中国などアジアの6つの国・地域の大学生が11月、神奈川県平塚市の東海大学湘南キャンパスに集まり、英語による討論の展開能力を競い合った。「北東アジアディベート大会」。13回目の今回は、英語圏の国への留学経験者が多い韓国勢が優位という前評判を覆し、地道な努力を重ねてきた東大チームが優勝した。「日本のディベートの存在感を高める」ことを目標のひとつに掲げ、日本開催に尽力した関係者に確かな手ごたえを感じさせた。

この大会が始まったのは2004年。以来毎年開催されており、日本でも2008年となる今回の開催まで8年を要したのは、韓国や中国に比べ、日本では英語ディベートに対する認知度が低く、大会運営を支援するスポンサー企業がないことなども背景にあった。

### 「大会招請し、注目度アップを」

こうした中、かつて国内のディベート大会で優勝した経験を持つ綾部功・東海大学准教授(57)ら関係者が、一丸となって会場の確保や運営組織づくり

に奔走し、国内の学生が多数参加できる日本開催を実現させた。

旅費・滞在費とも参加者負担にもかかわらず、国内外から集まったディベーター、ボランティア、審判らは総勢300人以上。日本からも東京、京都、早稲田、慶應、立命館など15大学が参加した。

大会のルールは、即興型のパラメンタリー・ディベート(英国議会)方式で、1チーム2人。1試合は4チームで対戦する。開始前に論題が示され、各チームは約15分間で準備し、各7分で与野党に分かれて討議する。

与党(肯定)か野党(否定)かを選ぶ自由はなく、自らの意見とは異なる主張をしなければならぬこともある。

77チームの予選が11月26日にスタート。絞り込まれた4チー



決勝戦で熱弁をふるう韓国のディベーター



表彰され壇上に並ぶ決勝進出4チームのメンバー。左から3人目と4人目が優勝した東大チームの2人

ムで28日に決勝戦が行われた。対戦するのは、韓国の3チームと新本寛人さん(19)と山岸拓真さん(22)の東大チーム。

### 「日本チームの努力に感銘」

決勝の論題は「北東アジア諸国は歴史的対立を解決するに当たり、まず和解することから始めるべきである」。肯定、否定各2チームが演説を行い、ライバルチームへの反論、それに対する再反論が繰り返された。

1時間以上にわたった審判団の協議の結果は――。肯定の立場から、話し合いによる和解への道を説いた東大チームに、審判団の全会一致で最高点が与えられた。

「大学での研究テーマは戦後日中関係史。この論題も想定していました。運がよかった」と語るのは4年生の山岸さん。1年生、新本さんも「先輩に助けられました」と謙虚だった。

韓国の大学で法学の授業を英語で行う教員で、ディベートの指導者としても知られるジョシユア・パクさん(39)は、今大会でも審判を務めたが、「韓国のチームもレベルが高かった。でも、日本チームの努力が上回った。感銘を受けた」と話す。他の審判たちも同様の印象を持ったに違いない。



トロント大学

1827年創立。学生数は、学部と大学院を合わせて8万6709人（うち留学生は1万5931人）で、カナダ最大の大学。



トロント大学キャンパスの賀来さん=本人提供

海外で学ぶ・リレーエッセー ②④  
カナダ トロント大学  
「普遍的学問のための多様性」

立教女学院高校（東京都杉並区）卒、トロント大学1年（執筆時）

賀来 ゆり恵 さん



幼い頃から、いつも宇宙へ行くことを夢見ていた。そして自分が大学で何をしたいのか、高校にいた頃には既に明確な考えを持っていた。  
「宇宙に少しでも近づきたい。天文学を学ぼう！」  
第一志望がトロント大学だった。2年から専攻する天文学の学部は、宇宙開発に関する世界中の研究機関やプロジェクトと

提携しており、カナダの他のどの大学よりも多く、それらに関わる機会が学生にも提供されている。自分が宇宙について学びたいことが、この大学でなら全て学べる。そう確信した。

トロント大学は、生徒数、プログラム数、研究分野のいずれにおいても大きな規模を誇る。1年を終えた今、これこそが、いつも何か面白いことがキャンパスのどこかで起きている、この大学の活気の原点なのだと感じた。例えば、大学で開かれた地球外生命体を探す米航空宇宙局（NASA）の研究者の講演会に行ったとき、初めて宇宙生物学という分野の存在を知った。カナダ人宇宙飛行士は講演で、どのようにして宇宙飛行士になったのか、人生においてどう夢を実現するかを話してくれた。これらの話はみな私の宇宙への思いを一層強くし、今自分がしている勉強への大きなモチベーションとなった。

また、大学ではこれら学術的なものの以外のイベントも盛んだ。インド・フェスティバルのような文化的な催し、性的少数者（LGBT）を対象とした懇談会（カナダはLGBTに対して非常に寛大だ）、無料ヨガ教室のような健康促進イベント、そして大学内の劇場ではドラ

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェローシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェローシップの詳細はウェブサイト (<http://ryu-fellow.org>)へ。

マ・フェスティバルも行われる。カナダの大学を選んだ理由は、その教育システムにもあった。カナダにはおよそ90の大学しかなく、だからこそ、その多くの大学が高い教育水準を保っている。また、その多くが州立大学ということもあり、比較的安い学費で質の高い教育を得られるのは、魅力的だった。

どのような文化的背景を持つていようと、自分に対してどのようなアイデンティティーを感じていようと、何に夢中であろうと、私たちはこの多様な空気の中でいつも自分の居場所を見つけることができる。好きなことをより好きになり、いつも新しい何かを見つけたチャンスをあふれた、この雰囲気こそがトロント大学最大の強みだと思っている。（会報編集部抄訳「The Japan News 2016年6月19日」）